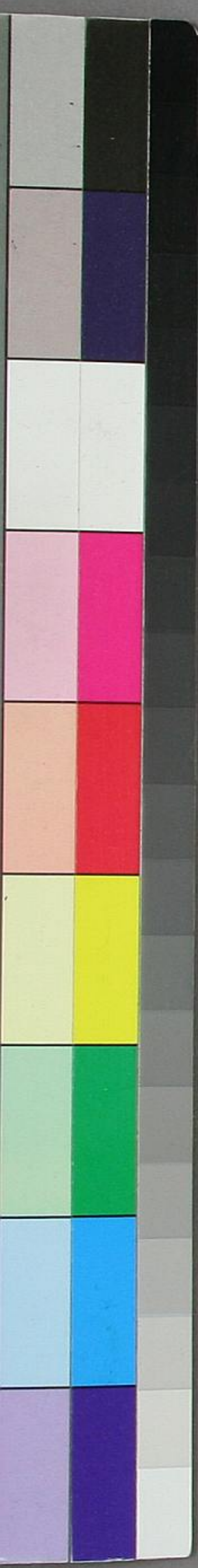


驕人必慄篋





服部應賀著

驕まがり

人じん必ひら

慄り

筐たこ

惟た之こ異と奇き



定價三錢五厘

A 772

48-7693

官許明治七年五月四日

在下人間 萬事申用上

老おと若わかつるらう無む
 吾われのこころ馬鹿ばか
 その中なかあかあか
 福ふくをくわくわ人ひとのこころあり

驕人必慄筐

○ 傍言

豚部應賀著

夫おの憂うれ患うれふそと生あ者らのあ安やす樂らふら終おるひとあるら古こ人の論の言げ廣く
 大おほるらうか実じ小こ貴き賤せんとよ小こ儉けんをわ忘わすまして奢あ小こ満まん
 者もののいろを子こ孫そんのあ榮さかをみ見みとあらるるをてよ茲こゝ小こ大たい
 都みやこ會の大だい道どうのあ峨あ々々とあるら大だい盤ばん石いしのた高たか山さんふりぎと
 出で現げんせり然しかるらふら凡たゞ人の眼めみらるる愚ぐ蒙もうのう雲くもきり
 覆かひま是こゝろをみ見みことあらるるらがあへるそのけい采さいをしつて人をそめく

國中の山を何由登るも勞しく下るも安きほど由
此山ハそよふ反て登るも安きと平地を行ぐ如
しき下るも難ことさあぐり 劔山ハの平ふ如く
ふまは既ハ古語ハ由儉より奢ハ入安く奢
より儉ハ入ぐしと何に知ハ一扱此山ハ
現の来曆を尋まハ當今府下の兆民男女を
さるとハ奢ハ長ト殊ハ中人以下の奢ハ限に
十倍をるがゆへ其惡念の微塵積て終ハ此大山
とあり天下の大道を妨ぐまハ此山を名づけて大者山

とも又潜上ガ嶽しゆハ此麓より絶頂まへの高業
と見まハ怪々たる茶店揚弓の類ハ具負進上と
印せハ暖簾の下ハ新造年間立並んで声音ハ
つくろハ田夫野人を見てもハ休るまハ掛るまハ腰
と加えて遊樂人の懐を開るまハへとも其得る
金の半ハ湯屋と髪結ハ持運へバ日ハ勤定合て
錢足ハの生活あり又艶く嘿々たる倭洋両店兼ハ
割烹家を見まハ二階坐敷ハ昼夜の強歌恬然る
ハ。みんるまハこの屋七兵エガ饗應ハ角力おんくら古

めけども残截頭の壁人の半髪せんぱつの晒落さらの土瓶どびんより水みづ
と虎とらのお化まじりで褒あはれとどきと古郷こきやうの妻つまの糸いととしる遠邦えんぱう五
九郎くわうらうのか客様きやくさま方千脚せんきゃく万来まんらいと祝いわひ出る内儀うちぎの空笑くうせう
ひふの城しろのかりるふ盃さかずきを傾かたむけ忽たちまちサツクの月つき給殿たまひより
新貨しんわの花はなびらを一坐いちざへ降くだり天上てんじやうめけの快樂くわく五衰ごすい
りどあはと叔おと此山ここのやま第一だいいちの遊郭いうちまの諸しよへ滅亡めつじやうする名所なごころ
るりしが過年をねん牛馬うまの算そろを御解放ごかいほうの大功德だいこんどく小より
庄司じやうじ甚右しんじやう工門くもんが魂たまも永ながき獄縛ごくばくと免ゆるきて開化かいけの美
政せいを拜まがりて一前いちぜん糸女いとめの業わざの中なか元もと歴れき々の娘むすめもいる

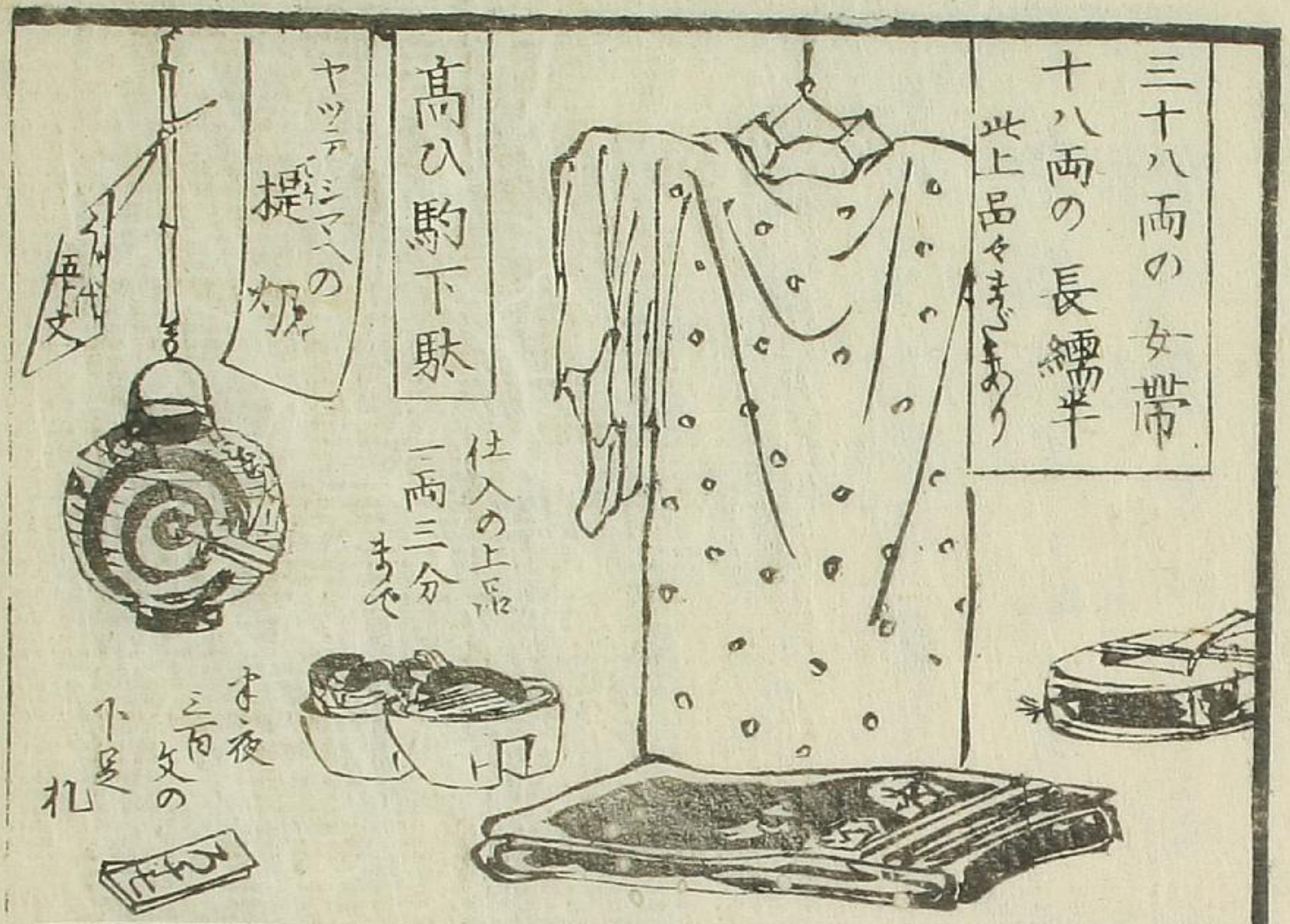
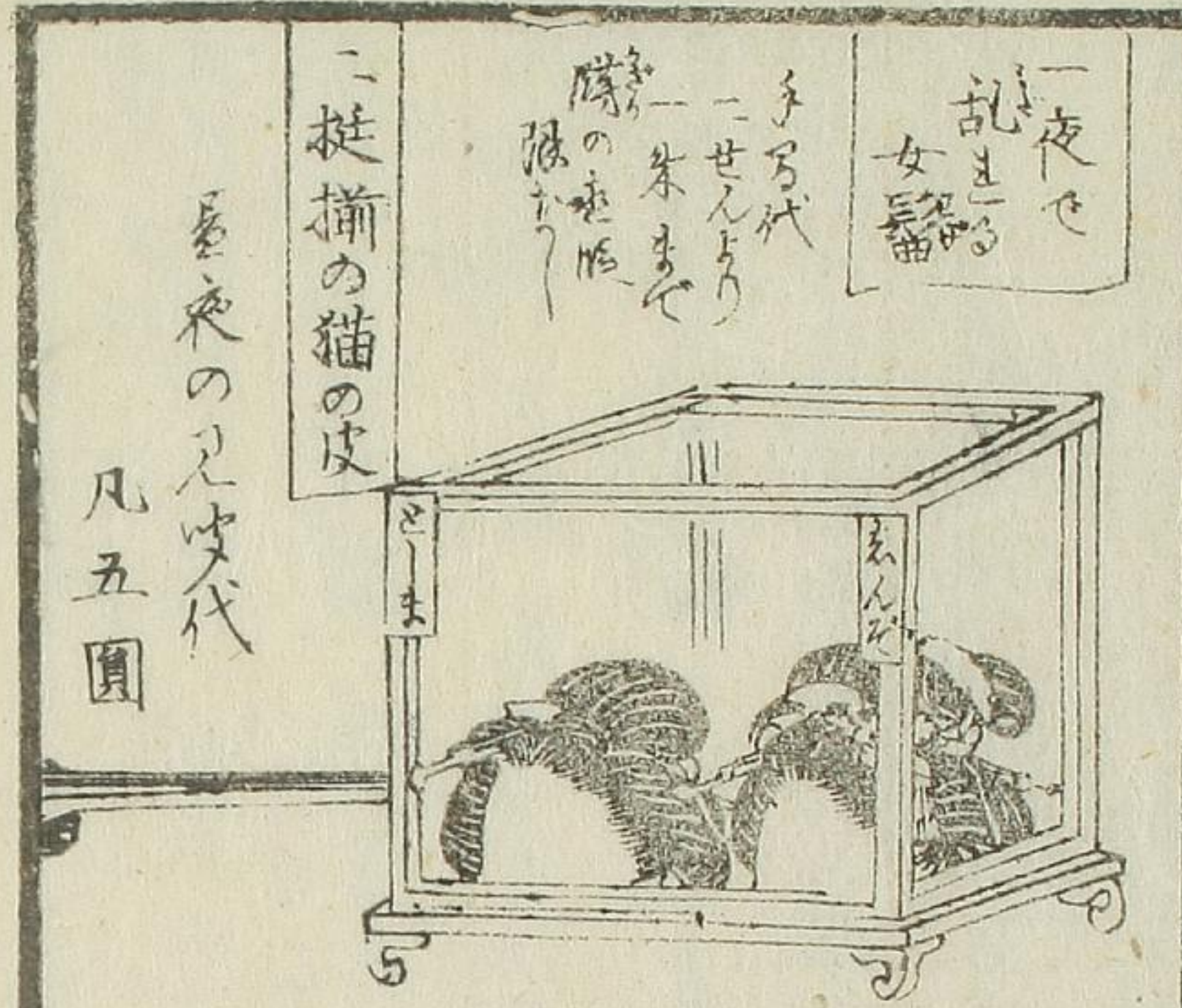
と聞きぐまきりて其親そのおやの活計かつけいの為ためあるまきか古語こご小仁こごじん
君きみも用無もちな臣おみの養難やうなん一とあはとどき維新いしん以来いらい永平えいへい
不勤ふきんの臣おみ小由こゆ晋しんく家録けかりをよめる所ところ已やむらば身の
自由じゆうを得えきしむるは是こゝろ寛大くわんだいの御慈憐ごじれんあるまは篤あつと
勤辨きんべんの上うへ正業せいぎやう小原こはらづくべきありあふ左ひだりいなく
我われ手足てあしを勞あはせば雲うゑを抓つかむかるる商法しやうぽう小かきこ
資本しやうぽんも心を失うふも當然たうぜんるれ又また悪弊あくへいの者ものの身の自
由じゆうをゆりてしと一を取とりあやまりて暇ひま小ありしと同輩どうぱいを
透引すゑひ又またさきさきしてくふも吞翳おんあす日ひも吞喰おんくふかひ終はる

究迫して落魄是非なく娘を賣う又ハ些少の債ある
春夏の腰掛へ出して酒茶の合手とする是を開化
の活計採と自負する何ぞや前条の業ハ卑賤
まゝ必死の場を助うるといふ由深く忌憚るといふ
ありふ士的身としてかゝる賤業小かゝりて子の名を
一生活きまゝとて親として子と愛する道ハ鳥
獸と見よう。誠ハ親の奢の債と子が贖うと其顔
の白きを見て其親の心の黒きを志る者なり又此
峯ハ歌舞妓所々にあつて此番附辻々搦々の

元ハ見物を促せば主の苦勞ハ露不どもおりの尻のりゆ
寝るの女房娘闌ハ起て化粧のへハを寒とあへ
て兩肌を脱。志や不んや香水やら踊やる合鏡
をゆい／＼着飾がでまゝいるや合乗の人カ車より魂
を先へ飛をゆり又一兩二分の駒下駄を憑虚は
歩行者ハ途中ふつ／＼の凸凹あまば道普請の
るさを誇れども道のころさをたゞ是を勞まるとい
るふか此山ハ登る者ハつゝ手足ごころ終ふ身を
亡るゆゑ志せば昔或人我家を忘て隣の家ハとい

大者山 客隨見買
 潜上嶽 贅品直段附

日の入 年月



つゝをあまりの事として是を聖人へまことけまば家を
忘るゝのまごゝゆのこと我身を忘るゝ人まありと聖
人の答へらまゝの渠等の人をのりぬるまこと燈消
て闇を走り奢を究めて貧を去るゝの此山へ登り
一者ハ此頂上へ至りて始て目が覚るといふ後悔
ハ先へ立む山下よりハ借財鬼へ責来らまて日頃を
貧の病と苦みあはば外の病のるまゝといふ諺ひ
ゆ今思ひ去るゝその三絃撥見臺う質種といふ
呑喰の責を防げとも焼石へ水も溜らば二面で令

の高利をかゝるゝ右をふせげば左へ燃立あるとを立れば
あるこがあく二間の口へ九尺の障子で居ゆいづれ
後へハゆくまば是非るゝ此山の絶頂より一方の貧
乏谷へ墮落する者日々多し此墮落人を見よ
バ見よ今見世先へ身代限の札を下又重代の家
蔵を立退て親族へ同居する者或ハ鼻僕日傭
とる者ハ此だらく人が半ありまは是等の前車
を見て後車の禁ふ若此山の半途へ登る者ハ早
く身を顧て質素の平地へ下べし昔孟母ハ孟子を

育そそる時住ぢ所しよを撰えらんで遂つひに聖人せいじんとなるを今此府
下を見みる小繁こはげ花町はなまちハ勿論もちろん場末ばつまつの端々たんたんまで由よしく
奢おごり行届いきて其日稼ひせきの油汗あぶらあせをその女房娘にようぢやうぢやうが頭かぶ
〴〵〴〵先ままぐ小費つひやして長屋中ながやちゆうの先達せんたつとなり穂ほ
和わの少女むすめを同行どうぎやうす。昼ひるハ公こうるの物見遊ものみあそ参まゐり夜よるの
寄席よせあゝの縁日ゆかりと二人透引たういんへハ五人ごにんとするり五人ごにん翌日あした
ハ十人じゅうにんと次第しだい小増こぞうとバ篤誠とくせうの親おやひとハ小子こごを育そるう
よき町まちを尋たずねると由よしかそらくなり。田夫織女でんぷあひめを常とこに
鹿食粗しかじそ服ふくめて身み骨こつを勞らうし作り製せいま米穀衣類まいこくいるい

と同一どうい人間の渠みち等らが為ために坐ま喰くをささるさるるより由よしか
喰くの身みとるりて一生いっしやう樂らくらとそが理ことありとて終つひに
都會あま小走こそうり集ある時ときと是こゝ飢渴けいこく國こくの基もととるらんと
或有ある志しの者もの三人報國ほうこくの為ため會議かいぎ小及およびて先ま一人ひとりが
す此山こゝ小潛上こせんじやうとす男おとこ女めの頭かぶを刺さり其毛そのけを以もつて大毛おほけ
網あみを造つくり夫おつとと山やまの腰こしふりけて人ひとりら。と由よし北國きたこくへ引ひ移うつ
て北海ほくかいの埋料うめりやうとす時ときハ無用むじやうが有用ゆうじやうとるるのこゝろハ悪あく
弊へいも跡あと小残こざんら後人ごにんの見みせしめ小是こゝぞよりとりハ
又またその手段しゆけん甚難しんなんハ此山こゝハ庶人しよじんの身み々々と錯さく小凝固こうこ

まろしーかき岩石あまあまかき鋤すき鋤くわの及ぶりのあまかき祿しきを西洋流
みて大炮と打うけ微塵ちりとまらかきか手て軽かろしとかきりかきバかきまかき
御ご西せい君きんの發明へいめい感かんトかきけかきらかきかかき仰おほ吾ご國こくを神國かみくにるかきまかき神かみ
の御ご未みの人間にんげんの事ことの善ぜん惡あくとかき神かみへ訴うたへかき然しかるかき一ひと況げんや
報國ほうこく誠忠せいしゅうの獻言けんげんいかきくかき納受なうじゆのかきあかきまかきとかき發言はつげんをかきれ
ハ小田原おだわら雀すずめの千声せんせい由よし此こゝ鶴つるの一声いっせいハ感かん伏ふく一ひと夫おとより三さん
心こゝろ一致いっしとかき都會とほ會かいの鎮守ちんしゆを祈いのけかきらかきまかきまかき都會とほ會かい鎮守ちんしゆの
明神めいじんハ是こゝまかき心こゝろやかきあかきひかきごかきとかき女子にょし小人じゆじんの情弱じやうじやく我われ終はつの
願望がんぼうハ聞きらかきまかきらかきとかき聞きあかきらかき己おのれハ笏しやくとかき由よし投なげかきまかきらかきんとかきまかき

まひし折をりかき開明かいめい誠心せいしんの獻言けんげんるかきまかき捨すおかきまかきかかきくかき速すみ
坐ざハ託宜たくぎを下くだしかきとかきあかきまかきとかきるかきかかき此こゝ都會とほ會かいハ諸神しよじんの氏子うぢこ
多く寄留きりうして入いれかきまかきらかき全國ぜんこくの神かみくかきハ此こゝ趣意しゆいを述のべかき
諸縣しよけんの神慮かみりよを入札いれさつあかきて受取うけとりかき其その第一だいいちの善法ぜんぽうとかきりかき
諸人しよじんハ禁戒きんけいを示しまかきらかきんとかき忝かたじけなくかき神筆かみひつを添そへかきまかきらかき
是こゝハ入札いれさつの筐かみを添そへかき使者しや神かみをかきしかき諸國しよこくの神社かみぢやへ持もつかき
廻まわりかきめかきらかきまかきらかき其その筐かみ今日けふ社前しゃぜんハ當着たうちやくまかきらかきまかき今日けふハ
諸人しよじんのびつくりおどろきかきまかきらかきらかき轉まじかき杖つゑハかきまかきらかきらかきぬかきぬかき早はやく
正路せいじゆハ立たちかきまかきらかきまかきらかき此こゝ神託かみたくの答こたを免まりかきまかきらかきまかき其その使神しよじんの尊うん

と聞ふ子として親の稼と盗者ハ人喰島へやうしやう又勤我
 せび小禄を取らうくとして居る者ハ真綿心首とメるとり
 又親として子小教へかく毎日買喰の銭とやる者ハ先祖の墓場
 小於て石塔責ふあふとゆふ又我手小髪の結へぬ女し裁縫のこ
 ぬ女ハ其手へ食物を持せぬ此をる秘密とお先うる神へ
 して甚ど恐入れども未か目あからぬか方とゆふ同ト 皇國小生
 あらむを同トか米とゆふ御縁ゆらと憎口とゆふ憚らるび小皆様方のお
 為と思ひてびらう箱を開ぬうち小極内々のお咄也他國へ他言ハ
 かく御無用了

明 治 七 年 六 月

驕人必慄冊讀切

服部應賀著
 猩々曉齋画

小学必讀 童子問答号

萩原己彦著
 吉田庸徳撰

金庫三代記全三冊

豚部應賀著
 猩々曉齋画

東京 書林

濱町三丁目
 五番地

星野松蔵

11 530

010190524901

